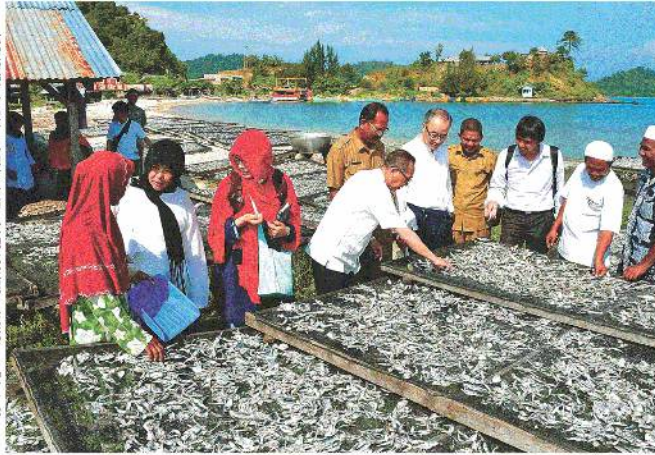


震災教訓の共有むすび塾@インドネシア (河北新報社と共催)

掲載日:2013年04月25日

(C)河北新報社



津波被害を受けた漁村を訪れ、地元住民と交流するむすび塾のメンバー。24日午前10時のラユン村
(写真部・佐々木浩明撮影)

むすび塾@インドネシア・ラユン村

【バンダアチエ(インドネシア) 高橋鉄男(報道部) 河北新報社】東日本大震災の教訓を防災・減災に生かす巡回ワークショップ「むすび塾」を24日、バンダアチエ市に近いラユン村で開いた。国際協力機構(JICA)との共催。2004年のスマトラ沖地震で被災した住民8人と東日本大震災の被災者3人が参加し、被災後の生活再建について話し合った。(30面に関連記事)

ラユン村は同市から25キロで集団移転を決め、被災地西に離れた漁村。津波後2年ほどほとんどの人々で壊滅的な被害を受け、戻ってきた。移転先も、被災後は海から1キロ、集落ごとに区分したとほぼ離れた山沿いに集団移転。被災前からのゴミを運び出し、ユニティを大切に守る。村助役のアハヌディ(48)は「住民投票で非政府組織(NGO)を呼び寄せた。生活再建を助けてくれた。ユニティを大切に守る。ユニティを大切に守る。ユニティを大切に守る。」

ラユン村 アチエ州のアチエサール原にある。インドネシアのスマトラ沖地震で押し寄せた津波は最大35メートルに達した。3集落の約200戸すべてが消失。住民200人のうち約200人が犠牲になった。

生活再建 地域の力結束 住民参加ワークショップ

の支援で同じ規模の住宅が提供されたことで「貧富の差が見えにくくなった」と現地的女性。ただ、被災から9年がたつが、被災前に200隻あった漁船は25隻にとどまる。干物加工の作業場の再建もこれからで、生業の回復は遅れている。

進行役は被災・復興支援機構(東北)の木村拓郎理事長が務め、震災の語り部として東松島市の貝田行政区長中山勝文さん(67)、大崎市の水産学会指導員安倍志摩子さん(51)、多賀城市の東北学院大3年渡辺英莉さん(20)も参加した。

中山さんは「住民たちが力を合わせて生きようとしている姿が素晴らしい。日本の復興もコミュニティの力が欠かせない」と述べた。

一行は日本の支援で再建された中学校も訪れ、教育関係者と交流した。



いのちと地域を守る